

# トヨタ財団レポート

## THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号  
新宿三井ビル37F(〒160)  
TEL. (03)344-1701~3

Oct. 1982 No.19

### 第29回理事会開催

## 研究助成など120件の助成対象を決定

9月29日に開催された第29回理事会において、研究助成などの助成対象が決定された。今回決定した助成内訳は下表の通りである。

**研究助成**は、本年4月初日から5月末日にかけて一般公募し、その結果744件の申請をいただき、これらの中より、各領域別の選考委員会での厳正・慎重なる審査の結果、94件の助成対象が決まったものである。

**研究コンクール**は、NHKの後援を受けて実施しているものであるが昨年決まった研究奨励賞候補20件による予備研究の成果と本研究実施計画について、選考委員会による審査の結果、4件の研究奨励賞金賞と8件の同銀賞を決定したものである。

**国際助成**は、主として東南アジアを対象として、海外からの申請に応じて助成するものであり、公募期間は特に定めず、随時申請に応じており、年3回の理事会で助成対象が決定され、表中の5件は今回の理事会決定分である。

● 研究助成	94件	2億8,007万円
交通安全, 生活・自然環境領域	32件	1億0,882万円
社会福祉領域	24件	6,585万円
教育・文化領域	31件	8,682万円
特定課題研究	7件	1,858万円
● 第2回研究コンクール	12件	3,600万円
研究奨励賞：金賞	4件	2,000万円
研究奨励賞：銀賞	8件	1,600万円
● 国際助成	5件	1,899万円
● 翻訳出版促進助成	5件	2,294万円
日本向け版	4件	717万円
東南アジア向け版	1件	1,577万円
● 辞書編纂出版助成	1件	1,300万円
● フェロシップ助成	1件	2,000万円
● フォーラム助成	2件	400万円
● 合計	120件	3億9,500万円

**翻訳出版促進助成・日本向け版**は東南アジア諸国の文化・社会・歴史等の著作物を日本に普及させることを目的として、その翻訳料を助成するもので4月初日から10月末日まで公募し、年3回の理事会で助成対象が決定され、表中の4件は今回の理事会決定分である。また**東南アジア向け版**は今年度より開始したプログラムであり、東南アジアの人々が主として近代・現代日本に関する正しい理解を促進することを目標に、日本人の手になる日本に関する社会・文化・経営等の著作物を現地国語へ翻訳し出版すること、および、日本人による東南アジア研究の成果を現地国語に翻訳し出版するものであり、主としてその翻訳料を助成する。表中の1件はタイ向け版として今回の理事会で決定したものである。

**辞書編纂出版助成**は東南アジアと日本との交流活動の基礎となるべき東南アジア諸語—日本語の辞書の編纂と出版を促進することを目的に、本年4月初日から6月末日にかけて一般公募し、今回2件の申請のうちからタイ語の辞書1件が決定したものである。

**フェロシップ助成**は、日本の社会学者が国際的経験を身につけて、日本と海外諸国とのかけ橋となるよう育成するためのフェロシップで、財団法人国際文化会館が運営する「社会科学国際フェロシップ・プログラム」に対して助成しているものである。

**フォーラム助成**は、今後の財団のプログラムを展開する上で重要な、外部の自主的な研究会活動を助成するものであり、本助成は財団と研究会との合議に基づく計画助成で、一般公募は行わない。表中の2件は今回理事会決定分である。

10月15日に行われた助成金贈呈式





昭和57年度(第8回)研究助成

## 助成内訳および選後評

本年度研究助成では、94件、2億8007万円の助成が決定した。下表は申請と助成との対照表であるが、件数で全体の採択率をみると12.6%と例年通りかなり高い競争率を示している。特定課題の採択率が63.6%と高いのは、本年度新規公募を行わず、継続分のとりまとめに選考の

重点を絞ったためである。

また、1件当たり平均申請金額と助成金額を比べると各領域とも申請額よりかなり絞った助成が行われていることがわかる。これは、一律何割の査定を行ったということではなく、なるべく多くの方に助成のチャンスを、との考えに基づき選考委員会での慎重な議論を通して、必要性の高い費目に絞って助成が行われた結果である。助成に当たって、各申請者の自助努力の必要性も議論された。

以下P3～P5に各選考委員長の選考評を掲げる。

昭和57年度研究助成結果〈申請—助成対照表〉

		全 体	交 通・環 境	社 会 福 祉	教 育・文 化	特 定 課 題		
1. 件 数	助成	94(12.6%)	32(11.4%)	24(13.1%)	31(11.5%)	7(63.6%)		
	申請	744	281	183	269	11		
2. 金 額	助成	2億8007万円	1億882万円	6585万円	8682万円*	1858万円		
	申請	26億9434万円*	11億724万円*	6億5999万円	8億7628万円	5083万円		
3. 継 続 件 数	助成	29(53.7%)	6(46.2%)	7(46.7%)	9(56.3%)	7(63.6%)		
	申請	55	13	15	16	11		
4. 継 続 金 額	助成	1億1871万円	3153万円	3680万円	3180万円	1858万円		
	申請	3億4226万円	9405万円	1億1046万円	8692万円	5083万円		
5. 1件当たり平均金額	助成	297万円	340万円	274万円	280万円*	265万円		
	申請	363万円*	395万円*	360万円	326万円*	462万円		
6. 研究種別件数	第 I 種	助成	20(11.0%)	5(7.4%)	5(11.6%)	9(12.7%)	1(—)	
		申請	182	68	43	71	—	
	II	助成	35(10.8%)	12(10.5%)	12(14.1%)	11(8.9%)	—	
		申請	323	114	85	124	—	
	III	助成	39(16.3%)	15(15.2%)	7(12.7%)	11(14.9%)	6(54.5%)	
		申請	239	99	55	74	11	
7. 研究種別金額	第 I 種	助成	2870万円	738万円	750万円	1234万円	88万円	
		申請	2億6863万円*	9818万円*	6576万円	1億469万円	—	
	II	助成	6282万円	2059万円	2155万円	2068万円	—	
		申請	6億6051万円	2億3161万円	1億8212万円	2億4678万円	—	
	III	助成	1億8915万円	8085万円	3680万円	5380万円	1770万円	
		申請	17億6520万円	7億7745万円	4億1211万円	5億2481万円	5083万円	
8. 研究方式	個人研究	助成	24(8.5%)	8(8.2%)	5(8.5%)	10(8.1%)	1(50.0%)	
		申請	282	98	59	123	2	
	共同研究	助成	70(15.2%)	24(13.1%)	19(15.3%)	21(14.4%)	6(66.7%)	
		申請	462	183	124	146	9	
		(国際共同研究)	助成	14(28.0%)	5(29.4%)	2(33.3%)	7(25.0%)	—
			申請	50	17	6	28	—
9. 申請者平均年齢	助成	47.7歳	46.2歳	47.7歳	49.2歳	48.0歳		
	申請	44.4歳	44.1歳	45.8歳	43.8歳	45.0歳		

(注) 〈交通・環境〉第I種申請のうち、申請額が大幅に規定の範囲を越えたもの1件、および〈教育・文化〉第III種申請のうち金額記載のないもの1件については、\*の個所を除外して計算した。( )の%は採択率を示す。



## 研究助成選後評①

## 交通安全、生活・自然環境領域



選考委員長 稲田 献一

本年度から3つの研究種別が設定された。従来からの予備的研究と本研究とをそれぞれ第II種、第III種研究とし、新しく個人奨励研究とよぶべきものを第I種研究としてつけ加えたものである。今年度はこのように新しい仕組みに改めての最初の研究助成募集であったため、あるいは申請者も財団の意図するところを十分にはご理解いただけない面もあったのではないかと危惧している。一方選考する側にあっても財団の意図に即し得たかどうかについては一抹の不安が残らぬでもなかった。

さて今年度も当領域では助成予定額（1億1千万円）の10倍近い申請があり、盛夏の最中を、2回の委員会はもとより、自宅における、1人平均100件の書面審査を通じて、計32件の助成対象を選出することになった。この間の委員の並々ならぬご努力とご労苦には心から感謝申しあげたいと存ずる。結果としては、281件の申請に対して32件の助成であるから、採択率は1割ということになる。以下3つの研究種別毎に若干のコメントをつけ加えておきたい。

◆ ◆ ◆  
第I種研究については68件の申請に対して5件の助成という、ほぼ1割という厳しい採択率になった。当初事務局からは第I種研究については多少冒険的なことも否定せず、他の種別よりも採択率を高めにもってゆき、若手の、将来性の期待される研究者をエンカレッジして欲しいとの要望もあり、選考委員もその精神には全員一致して賛意をいだいた上での選考であった。しかし現実の選考過程では、財団の意図するような、社会との接点に係わる研究においては、若手の研究者が独創性やすぐれた個性を発揮することはきわめて難しいことが判明し、

議論が進むうち多くのものが脱落してゆき、採択とされたもののうちにも、種々の難点が指摘されるものもあるといった状況であった。しかしながらそうした問題点が残ったものの、将来への期待をこめて最終的には5件を助成対象として選んだのである。この助成が今後の研究者としての人生をきり拓いてゆく上で貴重な一石となることを祈ってやまない。

◆ ◆ ◆  
第II種研究では12件を助成対象として採択した。現段階では意図通りの成果が期待できるかどうか未知数とされたものでも、次のステップで何らかの展望が開けてくるような、研究の芽としての活動を重視した。本来、研究とはやってみなければ成果の如何は不明であるということ、意図の独創性や研究チームの意欲やユニークさを重視し、あまり細部にはこだわらなかった。次年度以降への大きな発展を期待する。この種別は予備的研究ということであり、次年度において、実績を踏えてもう一度ふるいにかけてられるために、こうした選考のあり方も許容されると信ずる。

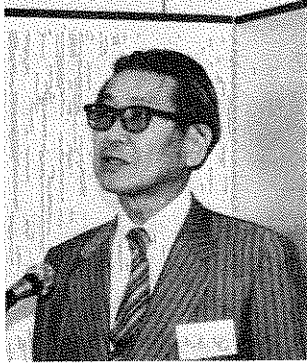
◆ ◆ ◆  
第III種研究では15件を採択し、本格的研究の採択率としては意外と高いものになった。内6件は昨年度からの継続のもので、残りの9件が新規のものである。第III種の新規申請の中には、文部省の科学研究費で行った研究の延長として計画されたものが数多くあったが、これは民間財団の助成の趣旨から、優先度をさげ、むしろ民間財団の助成対象としての特徴をもつ研究企画を優先させることを意図した。また当初は、すでにすべた実績をもつ研究者よりも、未知数の研究者の発掘を重視しようということとそのための努力をしたのであるが、やはり第III種研究にあっては、研究費も嵩ばることであり、あまりに冒険的なこともできず、結果的には研究プロジェクトとしての内容が充実し、過去の実績から成果が期待しうるものを相当数採択することとなり、若干当初の意図からそれたといえる。

◆ ◆ ◆  
なお本年度からは、2年間の研究計画については、その年度のうちの予算から手当することとしたため、本年度に限り若干予算面において窮屈になるのではないかとおそれたが、新しい選考委員は厳しい意見の方々が多く、予算の不足感は表面には出なかった。



## 研究助成選後評②

## 社会福祉領域



選考委員長 本明 寛

過去七年間を通じて、トヨタ財団の研究助成の意義が広く浸透してきたことは、日本の学術・文化の発展のために喜ばしいことである。特に既成の研究業績にとらわれることなく、独創性のある研究に助成をしたいという選考委員会の意向も「第I種研究」という枠の新設で実現できたように思う。

本年度の社会福祉領域に予定している助成予定額(6500万)に対し、今回10倍強の申請があった。選考委員の先生がたには7月～8月の二ヶ月間にわたり、綿密なご調査をいただき、さらに数回に及ぶ討議を願った。その結果、183件の申請から24件の助成を決定することができた(採択率13%)。この機会に選考委員の先生がたに心から感謝いたす次第である。

申請の全体を通してみられるのは、高齢化社会を反映する老人問題、都市化の進行にともなう児童・生徒の社会的不適応問題が多かったように思われる。今日日本の社会がかかえている重要問題として、当然のことかもしれない。しかし研究計画をみると、少数ではあるが場当りの調査に終って、問題解決に寄与するような成果の期待ができないものもあった。トヨタ財団の設定している研究種別の意味も十分に考えられて申請されることを期待したい。それにしても、助成金額の枠によって、社会的にも、学術的にも意義と価値のある研究を採択できなかったことも事実である。残念なことだが、お許し願いたい。

研究種別ごとに以下若干の感想をつけ加えておきたい。

◆ ◆ ◆  
第I種研究(個人奨励研究)については43件の申請があり、5件の助成が決まった。かなり厳しい結果になった。選考委員会としてはこの部門にかなりの熱意をもって審

査にあたった。若手研究者の独創的発想に興味を感じながら、内容・方法に今一步というものが多かった。しかし5件中2件は海外の大学に籍をおく若手のユニークな研究が選ばれた。この条件での研究者には一般に助成の壁が厚いといわれてきた点で、われわれとして意義のある方向を見出したと思っている。今回は、第I種研究の助成が厳しい印象を与えているが、今後の民間財団の助成の方向として重視すべきものと考えている。

◆ ◆ ◆  
第II種研究では85件の申請に対して12件が採択された。そのうち5件は障害児(者)にかかわる研究で、現場での切実な問題から生れたものである。福祉領域で特に力を入れている研究分野である。選考委員会としては、研究成果が現場の福祉へフィードバックされる可能性を十分検討した。もちろん、学問的な体系・方法を軽視するものではない。申請者の研究計画にはその点で問題のあるものもあった。

◆ ◆ ◆  
第III種研究では、55件の申請に対して、7件を採択した。第III種研究は第II種研究からの継続を本流とするものであるために、この7件はすべて継続分で占められるという結果になった。財団の方針も、当委員会の意図も新規申請を軽視するものではない。継続研究を優先するというルールもない。特に新規分については、再審査の期間をもうけて、慎重に各選考委員に評価を願ったしいである。しかし今回は研究の独創性、社会的意義、あるいは内容・方法・研究者の専門等からみて、継続研究より高い評価が得られなかった。今後問題を残さないため、選考事情を公にしておきたい。

◆ ◆ ◆  
社会福祉領域の特有の研究のみでなく、学際的見地から現代社会のかかえている諸問題の具体的解決に寄与する研究の多数の応募を今後いよいよ期待するものである。





## 研究助成選後評③

## 教育・文化領域



選考委員長 木村尚三郎

教育・文化領域の本年度申請件数は269件に及び、昨年度の242件に対し、若干の伸びを示した点が目につく。さらに、内外の外国人による申請が増えたこと、国際的な共同研究や、マイコン・VTRなどの最新機器を利用する研究の申請が多かったことが、本年度の特徴であった。ただし採択となったのは31件（うち1件は環境領域から移行したもので、採択率はほぼ1/8であり、環境領域、社会福祉領域ときびしさの点では同様である。

本年度から新たに研究種別が設けられたが、まず第1種研究（個人奨励研究）では、71件の申請に対し9件の助成が認められた。うち1件は前述の如く環境領域から移行したものである。9件中3件が、日本の大学院に在籍する外国人によるもので、日本の文化・社会・教育の特性を、異文化の眼で対比的に、あるいは総合的に捉えようとしているのが興味深い。何れにせよこのような外国人留学生は研究費を得る機会になかなか恵まれず、今後とも財団が積極的に助成を考えてよい人たちであると思う。

また第I種研究では、小・中・高校などの先生方による、教育方法についての応募もいくつか見られたが、研究計画の独創性や社会的な広がりについて若干難点があり、マイコン・VTRなどの先端機器に振り廻された気味もあって、残念ながら不採択となった。教育の分野は、若い先生方の新しい発想にもとづくチャレンジが、今後大いに期待される。

第II種研究（試行・準備研究）では、124件の申請に対して11件が採択となった。このうち2件は第III種研究から移行したものであり、第II種研究の採択率だけを見る

と、やや厳しい結果となっている。この分野では、大学・研究機関以外の、様々な民間団体の方々からの申請も、選考の過程で色々と議論されたが、最終的には研究意図・目的と研究内容・方法との不整合という点から、残念ながらほとんど不採択となった。民間で地道に行なわれている活動を、いかに有意義な研究にまで高めていくかが、今後の大きな課題であると思われる。計画を煮つめてのチャレンジが、今後期待されること大である。

第III種研究（第II種研究の展開）は、74件の申請に対して11件が採択された。第I種、第II種研究に比べて採択率はやや高く、うち7件は前年度からの継続である。

第I種、第II種、第III種を通じて、教育関係と文化関係の申請比率を見ると、第I種、第II種では4:6、第III種では3:7程度であった。しかしながら採択された分についての教育関係の比率は、各種別ともかなり低くなっている。その反面、日本文化、地方文化のあり方を、過去に遡って確かめ、あるいは諸外国との比較を通して明らかにしながら、諸外国との交流を図ろうとする研究については、具体的でオリジナルな発想に富んだものが数多く現われるようになって、地方化、文化、国際化の時代の到来を眼のあたりにする思いがある。独創的かつ着実な研究の続出を今後とも大いに期待する次第である。





## 第2回研究コンクール

## 研究奨励賞の選考を終えて

選考委員長 沼田 真

8月28、29の両日、研究奨励賞候補の20チームは、4月以来の予備的研究とそれに基づいて立案された今後の研究計画について発表を行った。全国108件の応募の中から選ばれたものだけに、さすがどれをとっても興味深く、また研究チームの意欲も並々ならぬものであった。12名の選考委員はこの発表に耳を傾け、提出された実施計画書のすみずみに目を通し、各チームの意図しているところを出来る限り正確に汲みとるよう努力をして選考に臨んだ。また、5月末から8月初めにかけては各チームにそれぞれ2名の選考委員が現地インタビューにうかがっており、その時のインタビュー・メモも選考の参考にされた。そして最終的には9月20日に提出された研究成果の報告によって検討し、金賞4チーム、銀賞8チームを選出したのである。

金賞は提出された実施計画書に基づいてほぼそのままの計画で研究を進めていただくというもので、過半数の委員から強い推薦のあったものである。銀賞は実施計画についてそのままの形では疑問があるものの、これまでに築かれた体制を生かし何らかの形で焦点を絞り、研究を実施していただくとするものである。委員会においてはしばしば賛否両論が激しくたたかわされた。これら金・銀合せた12件の推薦理由及び指摘された主な問題点は別に推薦理由書<sup>\*</sup>に示すとうりであるが、いずれにせよ各委員はこれらの今後の研究活動に大きな期待を寄せているので、大いに頑張ってください。

残る8件は、残念ながら、今回の研究コンクールの主旨からは、研究計画として未だ十分熟していないと判断されたものである。しかし、いずれについても何人かの委員からは推薦の意見が述べられ、惜しむ声が聞かれた。この中には市民運動あるいは実践活動としてみれば極めてユニークで意義の高いものも多かったように思う。また、あるものは5ヶ月間で十分にその意図や独創性の展開を計り得なかったものの、今後時間をかけて議論と試行を重ねていけば素晴らしい研究活動へと育っていくので

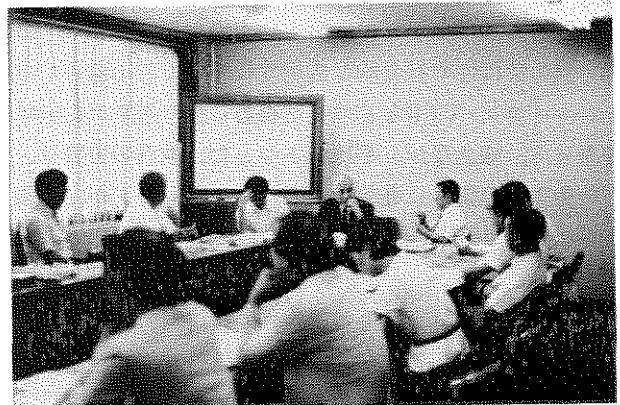
はないかと思われた。いずれにせよ多くの魅力と可能性を秘めていると思われるので、この準備段階において払われた集中的な努力を一つの踏み台に、今後の継続的な研究活動を期待したい。

今回の研究コンクールは第2回ということでもあり、私を含め半数の委員は前回の体験を生かしながらから選考に加わることが出来たわけであるが、委員会においては常に原点に立ち返った基本に係わる問題が議論され、市民参加型の研究活動のあり方について様々な意見が交わされた。各研究活動の評価について対立した見解が述べられることもしばしばであった。各委員はそれぞれに独自の尺度をもって選考に参加したというのが実情である。このような研究活動を評価する基準が明確に確立してるとは必ずしもいえない。今回の結果はそういう前提を踏まえた上での選考結果であるということをつけ加えておきたい。

なお、このような市民参加型の研究活動にあつては、その成果や意図をだれにでも分かり易く伝えることが重要になってくる。報告会や報告書における表現方法について、もっと工夫があつてもよいのではないかという意見も出された。熱心のあまり研究活動が一人よがりになってしまう恐れもあるので、各チームは今後ともプレゼンテーションについて十分に留意・工夫をし、平易に意図・内容を伝達していただくようお願いしたい。

※「第2回研究コンクール経過資料②」としてまとめておりますので希望者は財団事務局にお申出ください。

研究コンクール選考委員会風景





## 第2回研究コンクール研究奨励賞受賞一覧

金賞 (4件, 各チームに500万円助成)

受付番号	研究題目 研究団体名(責任者・氏名)	対象都道府県
1 2C-031	宮城県気仙沼市大島十八鳴浜における鳴り砂の発音特性の変化と海および浜辺の汚染との関連について 十八鳴浜研究会 (荒木 英夫)	宮 城
2 2C-052	3世代(現在, 1960年頃, 1990年頃)の遊び場マップづくりによる生活空間の点検と再生~三軒茶屋における話の採集と実践を通して 子どもの遊びと街研究会三軒茶屋ブロック (石川由喜夫)	東 京
3 2C-065	青森県内に生息するトウヨウヒナコウモリの生態と保護に関する研究~特に天間林村の繁殖集団の生態研究と人工誘致施設の完成をめざして~ 青森県自然保護の会「コウモリ保護研究会」(奈良 典明)	青 森
4 2C-099	長崎市における斜面都市環境の研究と総合的改善計画 長崎再発見研究会 (片寄 俊秀)	長 崎

銀賞 (8件, 各チームに200万円助成)

1 2C-003	身近な環境の観察を支援する情報の提供に関する研究 地域情報研究会・兵庫 (笹田 剛史)	兵 庫
2 2C-018	前橋市に於けるインフルエンザの流行調査とインフルエンザワクチン効果に関する研究 インフルエンザワクチン効果に関する研究班 (由上 修三)	群 馬
3 2C-025	"小字"地名の解折による農村社会空間のあり方に関する研究~米沢市六郷地区を中心として~ 環境農学研究会 (岩尾 徹)	山 形
4 2C-043	児童・生徒の目を通してみた沖縄首里地区の「ふるさ」と「にあい」のあるまち景観の発見と評価に関する研究 首里のまちなみを育成する研究会 (池田 孝之)	沖 繩
5 2C-046	空カン, 空瓶等の環境影響評価と大阪府泉北3市に適した対策の試行 和泉を美しくする会 (赤坂 和見)	大 阪
6 2C-054	同じまち(熊谷)に住む建築職人が支える地域文化・住宅=町づくりの実践 地域のすまい=まちづくりを考える熊谷グループ (時田 芳文)	埼 玉
7 2C-077	まちづくりにおける環境の教育力と環境イベント型市民運動の展開に関する研究~小樽運河問題を通して 小樽のまちづくりを考える会 (佐々木興次郎)	北海道
8 2C-085	関東平野北部における非火山性地熱の研究 北関東非火山性地熱研究グループ (小林二三雄)	群 馬





## 東南アジア便り

国際部門・プログラムオフィサー

岩本 一 恵

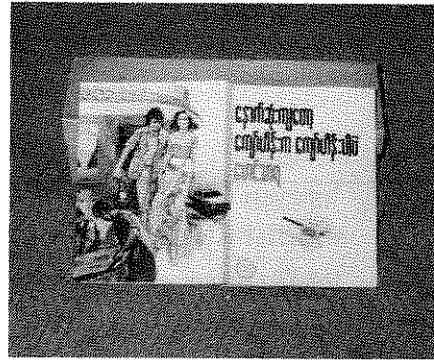
## ●ビルマに生きる

## ○ターヤード入道

この人、かなりのお洒落である。お金はさほどかけてないかも知れないし、新品ではないかも知れない。しかし色の取合せが非常にいい。今日は、白黒の大きな格子柄の半袖シャツに、白地に細かい黒い模様はやや厚手のロンジー（ビルマ人の常用する筒状の腰巻、サロン）をはき、雨なので白い帽子を被っている。ビルマの「リアリズム」作家の中で最も人気のある作家で、筆名をマウン・ターヤードという。齢50歳。背は高くないががっしりとした体軀で、鋭い目と舌鋒は人を圧倒する。文学の話を始めたら何時間でも疲れを知らずに語りつづける。髪を剃り落しているのだから、私は秘かにターヤード入道という愛称を奉っている。

今日のターヤード入道は数ヶ月前と同じように精力的に語り、白い大輪の花を思わせる夫人は数ヶ月前と同じように静かに微笑しながら聞いているのだが、どこかが違う。しかし何が違うのかわからない。入道の履いているゴム草履がくたびれ果てているが、そんなことは小さな事だ。しかしそれが小さな事ではなかったことが翌日わ

マウン・ターヤード氏



最新作「結局チョー・ヘインはチョー・ヘインだ」  
 かった。入道一家は一文無しだったのである。

## ○雨の中のうどん一杯

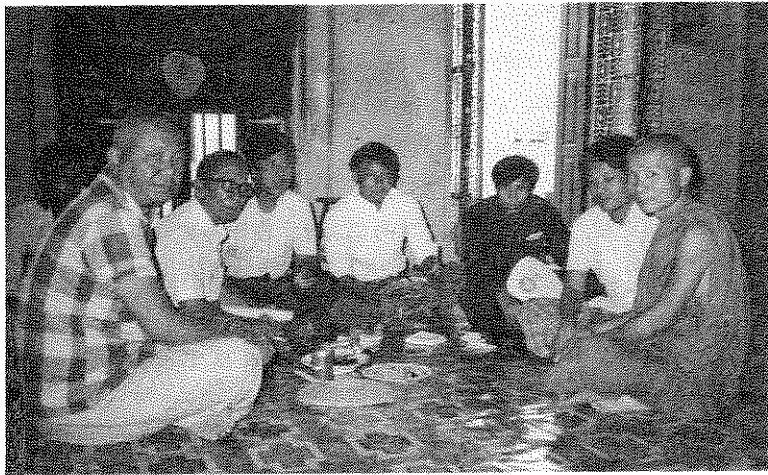
ビルマの面積は67.7km<sup>2</sup>で日本の2倍弱、人口は3,300万人で日本の1/5、一人あたりの国民総生産は160ドルで日本の1/50である。ビルマ式社会主義を標榜して国家建設にあたってきたが、少数民族との衝突、生産の伸び悩み、インフレなどの諸問題をかかえ、さらに日用品の多くをタイからの密輸品に頼らざるを得ず、庶民の生活は楽ではない。しかし一般に、人々は仏教への信仰があつく、長幼の序は保たれ、人情が細やかである。こういうところからビルマに惚れ込む日本人も少なくない。「ビルキチ」「ビルマメロメロ」という言葉さえもある。

それはさておき、入道一家の文無しぶりはひどい状況で、切れたゴム草履の替えが買えず、一家の主人である入道がはだして雨の中を歩くはめになった。これはビルマ人にとってはゆゆしいことである。さらに、ビルマの雨季は陽気なタイの雨季に比べ、来る日も来る日も雨の降りどおして、心理的落ち込みを誘うような雨の降り方をする。ターヤード入道の小説に「路上に突立ちむせび泣く」（南田みどり訳、井村文化事業社）<sup>\*</sup>という一風変わった題のものがあるが、これもやはり雨の中での心重い物語である。その上、食べるものもままならない。子供にだけはひもじい思いをさせまいとするが、入道夫妻は夕食も一杯のモヒンガー（具を上にかけてうどん）で済ませざるを得ない。しかも今日一日の食物はやっと口に入ったが、明日はどうなるかわからない。

## ○俺もファンさね

「リアリズム」作家の作品は娯楽読物とは違ってビルマ人の生き方を直視する。したがって、現実から逃避し





マンダレーの寺で歓談中のマウン・ターヤー氏(左端)

たいという庶民の思いが強い時代にはなかなか読まれない。活劇ものや探偵もの、恋愛小説などが好まれて、「リアリズム」小説など見向きもされないことになる。こんな中でもしかし、入道の「リアリズム」小説は人気が高い。ビルマで最も徹底した「リアリズム」小説が、である。ある日私はホテルからタクシーに乗って出かけたことがある。インド系の運転手は私に話しかけて来て、「マダム、あなたがさっき挨拶していたのはマウン・ターヤーでしょう。彼の小説はすごく面白いんだ。ピカーよ。本が出ると皆争って買うね。あつという間だよ、全部売り切れるのが。俺もファンさね。」「リアリズム」小説を読むのはビルマ人のインテリの一部と相場が決まっているこの国で、インド人の運転手にも読ませてしまう程の吸引力をもつ作家が入道なのである。

### ○雨の止むとき

こんな人気作家がどうして文無しなのか。理由は、本が出ないからである。つまり、検閲に通らないのである。ビルマでは、政治、イデオロギー、宗教については書くことが禁じられている。したがってどの作家もこれらを取上げることはしない。入道の作品でもビルマの政治を批判することは一切しない。書かれているのは庶民の生活と人生である。農民あり、漁民あり、鉱山労働者あり、路傍の物売りあり(近々、田辺寿夫訳で「それを言うマウン・ターヤーの言い過ぎだ」<sup>\*</sup>が新宿書房より刊行の予定)、売春婦あり、医学生あり、タクシー運転手あり、精神障害者あり、博打うちあり、錬金術師あり、様々な人々の現実生活が透徹した眼で描かれている。読者はそ

れらを通して、現代のビルマ人の生きざまを知る。

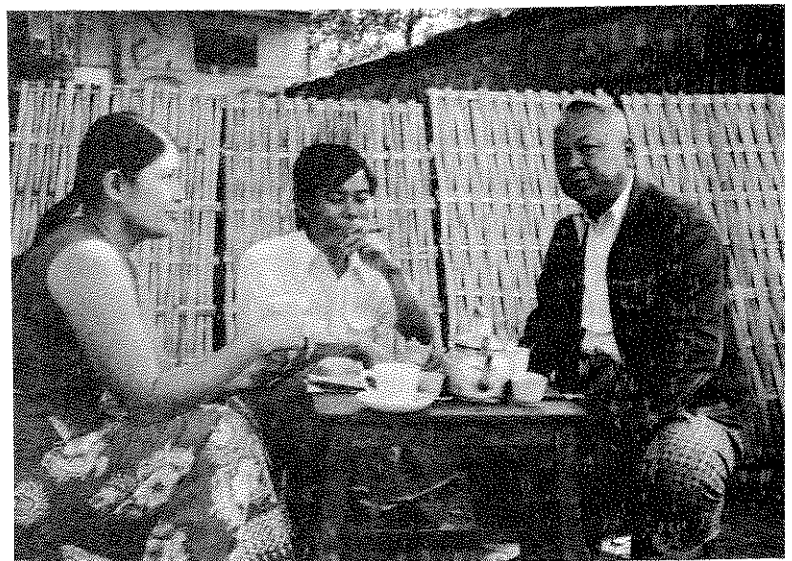
書く前に入道は必ず書く対象となる人々と同じような生活を現場でしてみる。したがって書き上げる作品は年に1~2冊である。これが検閲を通らないと飢えることになるのである。検閲に通らなかった作品が既に7~8冊ある。勿論、検閲担当者の指摘するとおりに書き換えれば検閲は通るのであるが、自分は自分の信じること以外は書くつもりはない、と入道は言う。入道の場合はファンが多いので、1冊の本が出せれば、その年一杯家族が何とか食べて行けるだけの収入が入るにもかかわらず、である。また、新聞社や雑誌社から記事を書かないかと誘われるが、それも書かない。家族と自分が生きて行くために書くということはしたくないので、したがって外国文学の翻訳もしようとは思わない。要するに短篇と小説以外、今のところ書くつもりはないのである。

飢えと隣り合せの徹底した生き方をしている入道であるが、常に変化を遂げている。動いていく現実をこれほど柔軟にとらえる作家も少ないように思う。

雨は冷たく降りつづいて止みそうにない。検閲を通らない作品の最も多い作家である入道が、私には祖国愛にあふれた大変な筋金入りの社会主義作家に思えるのだが、それを言うと私の言い過ぎであろうか。

※トヨタ財団「隣人をよく知ろう」プログラム助成対象

茶店で、右端がマウン・ターヤー氏、左端は夫人





## 助成刊行物紹介① (研究助成・成果発表等助成)

## 「コミュニティ・デベロップメントの研究

—カナダの漁村とフィリピンの都市の事例—

佐々木徹郎著 御茶の水書房刊 A5版 477頁 8000円

1960年以降、第3世界は急激な都市化を経験し、都市問題が大きな政策課題となってきた。本書においては、とくにコミュニティ・デベロップメントをとり上げることにより、それが第3世界の後進性の克服のためにどのような意味を、また限界をもつかを実地調査から明らかにしようとしたものである。ここに収録されている事例は、カナダのノバ・スコシアとフィリピンに関するものである。フィリピンの調査は、昭和50年度に「開発途上国の都市のコミュニティ・デベロップメント」として、香港調査と併せて行われた助成研究にもとづいている。これによると、フィリピンでは農村、都市のコミュニティ・デベロップメントと地方自治とを統合して運営するための Department of Local Government and Community Development を新設し、住民の末端組織としてのパラングアの育成、社会福祉省による社会福祉活動の推進にあ

たっている。また、民間団体とくにカトリック教会とプロテスタントの教会は、幅広い住民組織化活動、社会福祉活動に従事している。マニラでの最大の社会問題は、不法占有者(Squatters)の存在であるが、その代表的な地域であるトンド地区では、これらの住民が強力な組織をつくり、住民運動をすすめており、住民参加のコミュニティ・デベロップメントの方向を示唆している、など8章にわたって述べられている。

カナダのノバ・スコシアの事例については、1958年の調査で実施後かなりの期間を経過しているものの、アンテゴニッシュ運動と呼ばれる、漁村と大学が一体となった特色ある協同組合運動の背景や思想について記されているもので、フィリピンの事例と比較してみると興味深い点が多々見出されるであろう。

コミュニティ・デベロップメントは、住民の組織を基礎にした住民意識の変革の過程であるが、これが、究極的に新しい地域社会建設から新しい国民社会建設へと発展することに、途上国における後進性克服の鍵があると筆者は説く。その意味で本書は、この分野における格好な事例を提供し得ると言えるだろう。(渡辺記)

## 助成刊行物紹介② (研究助成・成果発表等助成)

## 「韓国両班同族制の研究」

江守五夫・崔龍基編

第一書房刊 B-5 440頁 5000円

本書は日本の研究者と日本にいる韓国人研究者と韓国の研究者の共同になる、いわば日韓学術交流の成果としての著作である。江守五夫教授を代表とする調査団は昭和52年度のトヨタ財団研究助成によって韓国の両班同族(韓国では「氏族」と呼ぶべきであるとの指摘もなされている)仁同張氏の調査を行った。張氏姓は韓国において九番目に多い姓であり、全世帯の約2% (136,000世帯)を占めている。この全張氏姓の約80%を占めているのが慶尚北道添谷郡仁同面を本貫とする仁同張氏である。現在でも仁同面には宗派をはじめ5つの支派が点在し、宗廟を中心に墳墓・書院が維持されている。また族譜等も比較的よく残っている。

本書の中心を成すのはこの仁同張氏の形成過程、両班としての支配構造、同族・家族の構造であり、同族譜等の文献、関係者からの聞き取り調査、儀式等の参与観察

によって具体的な姿が引き出されている。しかし本書はその事例調査報告に終ってはいない。同族社会の基本的な構造や近代化過程におけるその変遷の状況について論じられ、又、日本の同族社会との比較や沖繩の門中制度との比較も論じられている。両班同族社会の全体像を把握しようというのが本書のねらいであろう。

「二同族の祖先たちの間の子弟関係の有無がその同族の両班としての地位の上下—班格—に、今日なお影響を与えるものであり、ここに両班の一つの重要な特性が窺えるのである。」(P.122) 仁同張氏と清州鄭氏との間に400年にわたり続いてきた旅軒と鄭述という二人の儒学者の子弟関係をめぐる争いについて概述した後、江守氏はこう指摘している。現在の日本の社会では想像のつきにくいことである。最近の近代化・都市化の中でこのような同族社会の伝統が急速に崩壊しつつあることも事実のようではあるが、本書は韓国社会の深層・基層を知る上での貴重な研究書であると言えよう。(山岡記)

※「両班」は李王朝下の支配階層。どの本貫の何姓が両班でどの本貫の何姓が常民であるかが韓国の社会では容易に分る仕組みになっているという。



## 院生・研究生にも門戸広く。

本年度研究助成から

プログラム・オフィサー 山岡義典

今年も744件にもものぼる多数のご申請をいただき、選考委員の先生方に大変ご労苦いただいて9月末に94件の助成対象を決定することが出来た。助成対象一覧と各委員長長の選後評については別途に収録してあるのでご希望の方は財団事務局の方にお申出いただきたい。

本年度の研究助成の特徴は研究種別を設定し、第I種研究として個人奨励研究を前面にうち出した点にある。文部省の科学研究費の方でも今年から若手の研究者を重点的に助成しようということで、奨励研究の採択率は相当高かったように聞いている。当財団の第I種研究の申請者の中にも科研費に申請した方も多数おられたようである。そういうこともあってトヨタ財団の研究助成にあっては出来るだけ科研費で可能なものは優先度を下げ、そうでないものを重視するよう考慮した。その結果、国内の大学の助手・講師層の方にとってはかなり厳しい結果となった。代わりに大学院生・研究生、外国人の研究者、海外にいる日本研究者、民間の研究者など、従来他からあまり研究資金援助の得にくかった方々に助成出来た点は、民間財団の一つのあり方としてよかったのではないかと思う。第I種研究で採択となったもの20件のうち、院生・研究生のものを中心にいくつかご紹介しよう。

☆ ☆ ☆

まず日本の大学に所属する外国人研究者が3名採択されたのが今年の一つの特徴である。いずれも教育・文化領域に含まれる。

「日本人児童に於ける音楽的発達の研究——民族音楽と芸術音楽を通して——」(東大研究生 コンスタンテ・B・アンドレス)は、民族音楽や童謡は発達段階の子供にとって最も適した音楽であり、児童の創造性の発現そのものであるという仮説に基づき、3才から12才までの児童を対象にいくつかのテストを行おうとするものである。音楽学と心理学を修めたフィリピンの研究者が、日本における西洋音楽や芸術音楽の普及・振興に対して抱いた疑問から出発した研究テーマではないかと思われる。

「武士集団の組織構造とその思想——歴史的・文化人類学的研究——」(東大研究生 ウォルター・スカイア)

は、現代の日本的経営についての強い関心から、アメリカの研究者がそれとのかかわり合いの中で武士道を研究しようとするものである。両者を単純に結びつけることの危険性については選考委員会で突っ込んだ議論が行われたのであるが、自ら大手商社に長期間アルバイト勤務する中で生れた問題意識であるだけに、今回の佐賀・鹿児島での武士社会の研究からは単なる観念的・評論的な域を脱した成果が得られるのではないかと期待したい。

「伝統食品の風味に関する化学的分析——特に魚醤の香味成分の形成過程を中心に——」(お茶の水女子大学研究生 ノーリタ・サンセダ)は、栄養学を修めた研究者が母国フィリピンの代表的な魚醤である“パティス”と日本の“しょうつる”をとりあげ、その香気成分の化学的分析を通じて食文化と風土の関係を検討しようとするものである。食生活の比較文化論に実証的なデータを提供し得ることになればと思う。

欧米からであれ、東南アジアからであれ、日本にきた研究者は私どもが日常あまり気づかない事象に大きな関心を抱く。私たちから見れば一見唐突に思えるような事柄に研究意欲を燃やす。特に伝統的なものと西欧近代的なものとの混在しそれらが一体となって日常化していることに外国の研究者はある種の「不思議」を見るようである。外からの目による研究の成果が、私たち自身の物の見方に対しても新しい刺激を与えてくれるのではないであろうか。

☆ ☆ ☆

次に外国にいる日本の研究者への助成2題。いずれも社会福祉領域である。

「ガン増殖因子の精製および構造の研究および臨床的応用」(UCLA医学部シニアフェロー 北田真一)は、当研究者がネズミのガン組織より抽出に成功したガン増殖性の化学物質について、その精製を計り、構造決定を試みようとするものである。さらに当該物質の血中濃度を測定することによってガンの早期発見の可能性を探り、またその増殖を抑制する抗体についても模索しようという意欲的な研究である。単年度でどこまで進むかは別として重要な手がかりが得られることを望みたい。

「地域における老人福祉の日米比較」(エール大学社会学部大学院 橋本明子)は、これまで2年間にわたってアメリカの老人福祉について研究を進めてきた本研究者が、それとの比較において日本の老人福祉の実態を調査しよ



うとするものである。高齢者援助の実態の相違は、文化的な要因や社会の発展段階のちがいによるものというより、むしろ社会統合(Social integration)の相違によるものであるというのが当研究者の仮説である。ケース・スタディや参与観察によるキメ細かい実態把握と比較研究が予定されており、日本の実状をアメリカの学界に伝えるという点からも意味があろう。

アメリカではこれまで外国の研究者でも研究費を得ることができたようであるが、近年は状況が厳しくなってきたようである。異邦で活躍する研究者にとって少しでも、励みになればという気がする。

☆ ☆ ☆

この他第I種研究(個人奨励研究)ではさまざまな研究者がおられる。合計20人の内訳を見ると、上記に紹介した5人以外に、大学の助手・講師・助教授6名、公立研究所技師1名、短大講師1名、高校教諭1名、自治体職員1名、大学院生1名、民間団体3名、主婦1名となっている。

私どもの研究助成では専門の研究者以外にも巾広くさまざまな立場の人が応募されることを期待している。しかし現実的には約1/10という狭き門になっており、その意欲・熱意にもかかわらず採択できなかったものも多い。大変心苦しいことであるがお許しいただきたい。

ら研究助成の応募要項を受けとったが、応募しなかったことがある。」ということではないかと思えます。トヨタ財団にはこちらから特別に申し出るべき援助資金も、そのようなプログラムもありません。(勿論、申し出たことやましてや断られたことなどあろうはずがありません)その代り、研究助成は広く一般からの応募を期待しておりますので毎年4~5000通の応募要項を関係ありそうな機関・団体・個人にお送りしております。そして毎年助成予定額の10倍近い申請をいただき、選考委員会での厳正な審査により助成対象を選考しております。ですから、「応募要項」をお送りしたことをもって直ちに「援助の申出」と理解されてはいささか困るのであります。

取材班に話された方が誤解されておられたのか、取材班の方でそのように聞きまちがえられたのか、あるいは話のスジ立てをより興味深くするためにそのような表現をとられたのか存じませんが、またシリーズ全体の文脈から見るとやかく言うべき大した問題ではないかもしれませんが、「第三セクターとしての公正な財団活動」を目指して努力しております私どもにとっては、財団の活動についての誤解の種ともなりかねない表現故に、一言ご注意を喚起しておきたいと思筆をとった次第です。

10月12日 トヨタ財団プログラム・オフィサー  
山岡義典

拝啓 朝日新聞学芸部取材班殿

### 「文化と企業」シリーズに一言

貴取材班の「文化と企業」シリーズはいつも楽しみに読ませていただいております。精力的な取材によって、今まであまり論議されることのなかった分野を多面的にとりあげられておられることを高く評価したいと思います。勿論、私どもとしては企業の活動と財団のそれとを混同して論じておられる点など不満は多いのですが、それは立場や考え方の違いもあると思いますので、ここでは敢えて論じることは避けましょう。

ここでは、私どもの財団活動について誤解を招くような記事がありましたので、その点についてだけ一言申し述べておきたいと思えます。

10月7日付夕刊のシリーズ⑩中に「……、かつてトヨタ財団から資金援助の申し出を受け、断ったことがある。とあります。恐らくこれは「……、かつてトヨタ財団か

#### 編集後記

▶(財)公益法人協会は設立10周年を記念してこのほど、民間公益活動の発展に功績のあった個人及び団体を表彰いたしました。トヨタ財団は、団体の部で東レ科学振興会と並んで表彰を受けました。今後の活動の励みとしたいと存じます。▶本年度研究助成の対象一覧及び各選考委員長の選後評を収録した冊子がございます。ご希望の方はハガキにて財団事務局までお申し出下さい。▶第1回研究コンクール「身近な環境をみつめよう」の研究報告会を、来る12月4(土)、5(日)両日、東京港区六本木の国際文化会館講堂にて開催いたします。出席申込、プログラムのご希望等は財団事務局までお申し出下さい。

#### トヨタ財団レポート No.19

発行日 昭和57年10月30日

編集発行 財団法人 トヨタ財団  
(担当 久須美雅昭)

印刷 真友工芸株式会社

このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。無料です。